

**早秋雑感**

唯物ゆ  
唯心に我をみちびきし  
恩師の笑顔おもひ登りき

厚木市 荒井 一雄

正五九月参深山  
大護摩供修山上  
善哉善哉日本国  
春夏秋冬拜靈山

正月・五月・九月と  
高尾山に参り、  
大護摩供修行を  
山上にて承く・・・  
善き哉、善き哉、  
日本の国は・・・  
春夏秋冬、富士山を  
拜まるるゆゑ・・・

**折り折りの記(85)**

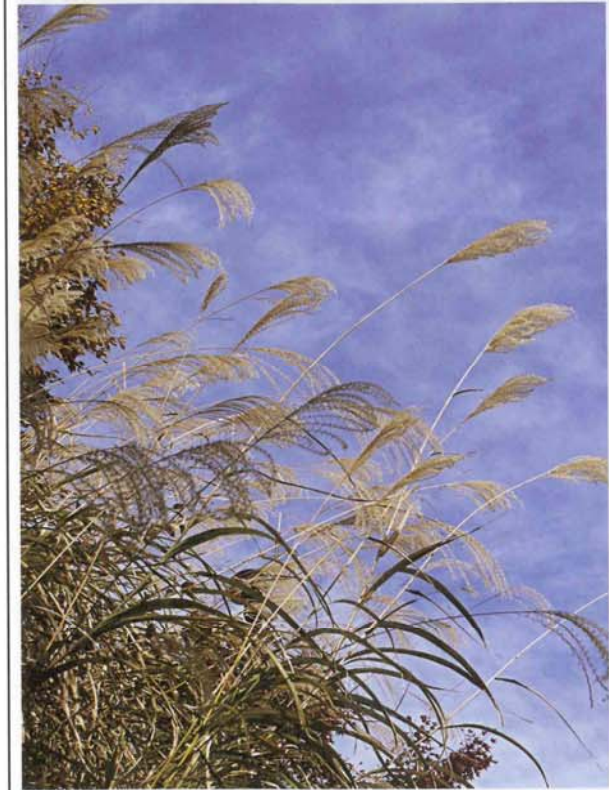
波多野 重雄

「山の日」に登山者よどむ高尾山

今年から八月十一日は「山の日」となる。曇空に傘を持ち、九時三十分高尾山口駅前を出発。琵琶滝路を蟬時雨の中登り、四号路の冷温帯林の落葉樹林を経て、十一時十分高尾山頂「十三州大見晴台」に到着。

登山者で足の踏み場も無い騒然の中、人垣の中国人が「愛好高尾山」(高尾山が好き)と喚声を挙げる。富士山も雲の中、救急設置場所を通り下山、葉王院の裏山に四葩の花が風に舞ふ。

(高尾山健康登山の会々々)



仲秋の名月の夜にはスキの穂等がお供えされる

言つた僧侶は相手に對して、「新たなものが生まれると、同時に過去のものは滅び去つて行く」という「落謝」の教えを説きました。相手を誹謗したのは問題ですが、仏様の教えを、日常生活の中で活かしていくことの大切さを伝えていきます。

人は感情を持ち続ける以上、時に誰かと衝突することもあつてしょう。

恨む気持ちは、日に日に積み重なつてしまふかも知れません。そんな時、この世の全ては僅かの間も留まらなさと観じてこそ、もしかすると心の重荷を消し去る助けとなるかも知れません。

念々に落謝して、昔の物今これなし。

(「雑談集」)

(一瞬一瞬に未来からやつて来ては過去に消え去り、昔のものは何一つ今に残らない) 夜空に浮かぶ月も、遙か昔から留まることなく満ち欠けを繰り返してきました。たとえ今は真っ暗闇の新月としても、いつかは円かな満月の光が私たちを包んでくれるでしょう。年に一度の名月が、今年も清かに照り輝いています。

(栃木北部教区普濟寺中)



年に一度の名月が清かに照り輝く(撮影・高岡輝幸氏)

「悪口」を言う人がいるからに他なりません。分かつていながらも容易に克服できないものなのでしよう。面と向かつて「悪態」をついたり、相手の見えないうちで「陰口」をたたいたり、インターネット上で悪口を書き込むなど「口撃」の種類も様々です。

仏教では、「人を悪し様に罵ることを「悪口」として戒めています(不悪口)。「善様」の対義語である「悪様」には、「悪意を込めながら、実際よくも悪く言う」という意味合いがあります。言葉が悪意に引きずられ、感情を抑えることなく過大に言い合えば、いつまでも争いが尽きることはありません。鎌倉時代の法令である「御成敗式目」第十二条では、「闘殺の基は悪口より起る」(争い殺す原因は悪口にある)として悪口を禁止しており、重い悪口を犯した者は流罪に処し、軽い悪口の場合でも身柄を拘束したのでした。それでも今日まで悪口が絶えないのは、やはり人間の悲しい性なのでしょう。かほるか昔の話。近江国(今の滋賀県)の三井寺(園城寺)というお寺に、学問にすぐれた、若い友達同士の僧侶がいました。ある時、些細なことから喧嘩が始まると、一方がみつともなくなるほど相手手を罵りました。

悪口を言われた方は、深く思い詰めます。どうしても許すことができません、好機を狙つて待ち伏せをし、太刀(刀)を抜いて走り掛つたのでした。僧は少しも騒ぐことなく笑顔になつて、「これはどうしたのか」と聞きま

す。「先日、私に罵詈雑言を浴びせたことを覚えておられるはすぞ」と言つてさらに駆け寄ると、「あなたには学識のある僧侶だと思つていたのに残念だ。あのことは、その場でもう済んだことではないのか」と語ります。その言葉をお聞きや否や、「なるほど、あなたを恨むことはないのだ」と太刀を収め、一緒に連れ立つて出かけたのでした。

この世の中は、一瞬も休むことなく、生まれたら滅んだりしているという道理(正しい筋道)を深く学んで信じていたからこそ、恨みの心が消えたのです。これは仏法の御利益であり、喜ばしいことです。

(「沙石集」)

この話の中で、悪口を

**法の水荖**

大正大学講師 高橋秀城 (51)

見る人に  
物のあはれを  
知らずれば  
月やこの世の鏡  
鏡なるらむ

(「風雅集」 崇徳院)

(眺める人に、しつとりと落ち着いた心を教えてくれる、月はこの世の鏡なのだろうか)

陰曆八月十五日の夜は、「仲秋の名月二十五夜」です(今年も九月十五日)。秋の収穫に感謝して、月見団子をこしらえ、ススキの穂や里芋・栗などの旬の物をお供えます。歌の中にある「この世の鏡」とは、人が生きていく上での手本や模範を意味します。自らの日々の行いを、玲瓏と輝く月に映すようにして省みたいものです。

ちなみに十五夜の次の日の夜を「十六夜」と呼び、十六夜と言えば、「十六夜空や人の世の中」という諺もあつます(「譬喩尽」)。「人の心の移り変わり

の早さ」を表すこの言葉は、人間の心の頼みがたさ、不確かさを語つています。

これまで、人が日常生活で成めるべき行いについて書いてきましたが、言葉による「悪口」もその一つです。好かれる人の条件として、「悪口を言わない人」というのがありますが、古今東西そのような人が好かれる人の条件になることは、いつの世もどこであつても「悪口」を言う人がいるからに他なりません。分かつていながらも容易に克服できないものなのでしよう。面と向かつて「悪態」をついたり、相手の見えないうちで「陰口」をたたいたり、インターネット上で悪口を書き込むなど「口撃」の種類も様々です。

仏教では、「人を悪し様に罵ることを「悪口」として戒めています(不悪口)。「善様」の対義語である「悪様」には、「悪意を込めながら、実際よくも悪く言う」という意味合いがあります。言葉が悪意に引きずられ、感情を抑えることなく過大に言い合えば、いつまでも争いが尽きることはありません。鎌倉時代の法令である「御成敗式目」第十二条では、「闘殺の基は悪口より起る」(争い殺す原因は悪口にある)として悪口を禁止しており、重い悪口を犯した者は流罪に処し、軽い悪口の場合でも身柄を拘束したのでした。それでも今日まで悪口が絶えないのは、やはり人間の悲しい性なのでしょう。かほるか昔の話。近江国(今の滋賀県)の三井寺(園城寺)というお寺に、学問にすぐれた、若い友達同士の僧侶がいました。ある時、些細なことから喧嘩が始まると、一方がみつともなくなるほど相手手を罵りました。

悪口を言われた方は、深く思い詰めます。どうしても許すことができません、好機を狙つて待ち伏せをし、太刀(刀)を抜いて走り掛つたのでした。僧は少しも騒ぐことなく笑顔になつて、「これはどうしたのか」と聞きま

す。「先日、私に罵詈雑言を浴びせたことを覚えておられるはすぞ」と言つてさらに駆け寄ると、「あなたには学識のある僧侶だと思つていたのに残念だ。あのことは、その場でもう済んだことではないのか」と語ります。その言葉をお聞きや否や、「なるほど、あなたを恨むことはないのだ」と太刀を収め、一緒に連れ立つて出かけたのでした。

この世の中は、一瞬も休むことなく、生まれたら滅んだりしているという道理(正しい筋道)を深く学んで信じていたからこそ、恨みの心が消えたのです。これは仏法の御利益であり、喜ばしいことです。

(「沙石集」)

この話の中で、悪口を